

## ヒア・カムズ・ザ・サン

ケープカナベラルの夜風は晩秋だというのに生ぬるく、しかし不快感は感じられなかった。レジーナはフォンの灯りをたよりに適当な礎石を見つけると砂をはらって、海のほうを向いてすわった。ぼくも彼女とおなじように、少し離れた礎石に腰をかけた。

ここ数十年のめっちゃくちゃな気候変動と温室効果制御で、このあたりの海岸線はすっかり変わってしまった。ぼくの尻がいま乗っかっているのも、かつてヴェルナー・フォン・ブラウンの時代に使われていた歴史的ななにかのかもしれないなかった。

カバンのなかから冷え切ったキューバサンド的な物体を取り出すと、ぼくはセブンアップで流しこんだ。食べ損ねていた夕飯をこんなところで食べることになるなんて、思ってもみなかったな。

フォンのバックライトを消すと、あたりは星明かりだけになった。暗がりにだんだん目が慣れてくる。海に向かってひらけた東の空には冬の星座が宝石のように輝き、南の地平すれすれにはヤシの木のあいだから、エリダヌス座の一等星アケルナルがちらりと顔をの

ぞかせている。星空だけはなにも変わらない。少なくとも人類の時間感覚では。

オリオンの左足から少し離れた空を、レジーナがじっと見つめているのに気づく。彼女の視線の先にあるかすかな天体に、ぼくは心当たりがある。

「エリダニ40……あのあたりか」とぼくもその方角を見上げる。「エリダヌス座、グレース先生のお手製プラネタリウムにもあったっけ。——いや、さすがにマイナーすぎるか。サンフランシスコからはアケルナルは見えなかったし」

「いいえ、ちゃんと載ってたわ。一等星クイズでやったもの」と静かにレジーナがいう。確信のこもった口調だ。「あのとき、アビーに先を越されて悔しかったのよね。でも、そのあとの星雲クイズで挽回したわ」

「……ずいぶんよく覚えてるな」ぼくは変に感心する。彼女、物静かな印象をもってたけど、意外と負けず嫌いというか執念深いところがあるみたいだ。

彼女は中学のクラスメイトで、ぼくらはじつに二六年ぶりの再会だった。といっても、べつにロマンチックな理由があるわけじゃない。ここ、旧ケネディ宇宙センターからの打上げを二週間後に控えた、ある宇宙ミッションに関する会合の参加者リストのなかに、偶然、彼女の名前があったんだ。

向こうは、赤外線天文学の終身雇用<sup>デニユア</sup>の教授。こっちは、去年までバイオ系の怪しいベンチャーを渡り歩いていた貧乏研究員。タウメーバ特需で、ようやくまともなバイオテック企業のポストにありついたらいい。しかし、専門分野があまりにちがうせい、それとも会うなりグレース先生の思い出話で盛り上がったせい、ふしぎとぼくらは一三歳の頃とおなじような感覚で話できた。

ああ、ちがうんだ。隣の席の女子のノースリーブにどきどきしてたあの頃、とかそういうやつじゃない。さすがにそんな甘酸っぱい感覚は、すっかり過去のものになってしまっている。

なんにだってなれる気がしてたあの頃。グレース先生が教えてくれる世界の秘密が楽しくてしょうがなかったあの頃。サンフランシスコが平和で温暖だったあの頃。

……うん、ロマンチックというより、むしろノスタルジックだ。

「……いよいよね」と彼女がいう。

「うん」ぼくは発射台のありそうなほうに目をこらしてみる。うんと遠くに、照明に照らされた鉄塔のようなものがいくつか見えるけど、どれがそうなのかは判然としない。

早朝から夜までつづくミーティングでへとへとになっていたぼくを、なかば強引にこの

海岸に連れてきたのはレジーナのほうだった。話がある、と彼女はいつていた。でも、心当たりがまるでない。

いっこうに切り出してこない彼女を横目で気にしながら、ほぼ空っぽになったセブンアップの缶をあおる。水滴しか落ちてこない。まあ、たまにはこんな星空の下のピクニックも悪くはないかな。

\* \* \*

ぼくらが八年生だったとき、世界は一変した。正直、それより前がどんな世界だったのか、あまり覚えていない。

太陽が暗くなった。太陽から金星に伸びるペトロヴァ・ラインとアストロファージが見えられ——タウ・セチの有人探査計画、プロジェクト・ヘイル・メアリーが立ち上がった。どういう経緯かは知らないけど、中学校でぼくらに科学を教えていたグレース先生が、プロジェクトに引き抜かれてしまった。困惑していた先生の顔を、いまでも覚えている。まあ、一時の辛抱だろう、打上げが成功したら先生も解放される——ニュースで先生を見かけるたび、ぼくらは気楽にそう考えていた。

先生はもどつてこなかった。

〈ヘイル・メアリー〉に先生が乗つて、——打上げからずいぶん経つてそれを聞かされたばかりは、大人つてやつが一瞬で信じられなくなった。そんなの聞いてない！ しかも往復二六年、乗組員<sup>クルー</sup>は片道旅行という特攻ミッションだったんだ——地球に帰れるのはビートルズと名づけられた四機の無人プローブだけで、先生たちは帰れない。全員が志願したのだと説明されたところで、中学生のぼくらにはただの理不尽にしか思えなかった。結局ぼくらとはろくに話もできないまま、グレース先生は一二光年のかなたに旅立ってしまった。そのままいつしか、ぼくらも大人つてやつになつて久しい。

まあ、人類も二六年間ただ手をこまぬいていたわけじゃない。異常気象や疫病、軍事衝突に大半のリソースを割かれながらも、人類はけっこうよくやったと思う。半数が死ぬという悲観的な予想に反し、現状ではなんとか八割程度の人口を維持できている。アストロファージのばかばかしいほどのエネルギー効率を利用することで、最終的な食料の備蓄が予想より上振れしたからだ。

しかしそれは、多くの騒乱や紆余曲折の上に成り立ったぎりぎりの奇跡だ。思い出したくない話も多い。一面の穀物畑は、もう北米大陸には存在しないだろう。合成<sup>オーガニック</sup>でない農作

物には、ホールフーズ・マーケットでも目玉が飛び出るような値札がついている。ぼくみたいな安月給はウォルマートの代替食材が唯一の選択肢だ。まあ、ジャガイモだけで全人類が食いつないだ一五年前に比べたら、ずうううつとましだけど――

ふと、昼間見かけた、レジーナのジャケットについていたバッジを思い出した。抽象化されたライ麦の穂の意匠。

〈コンソーシウム〉のバッジだ、と見るなりすぐに気づいた。人類の希望が託されたロゴ。「レジーナ、そういえばきみは」と彼女にたずねる。「もしかして、大学のほかに〈コンソーシウム〉にも所属してるのか?」

「ええ。ペトロヴァ光観測衛星にかかわってる」とレジーナが答える。

うーん、ぼくは赤外線天文学は完全に素人だ。まあ、そういう衛星があるんだろう。「……ああ、なるほど。すごそうだね」

「地球と火星の間の太陽周回軌道上に一二〇度の間隔で配置されている、三基の赤外線観測衛星のことね」と彼女は補足する。「〈リー・ジェ〉、〈オリーシャ〉、そして〈ライランド〉っていえばわかるかしら?」

ああ、それなら聞いたことが――いや、何度も聞いた。ネット中継のリポーターが、う

わずった声でその名前を連呼していた。あの日、かれらが検知したのは――  
ワオ。

「オーケイ……思い出した。思い出したぞ」ぼくは息を呑む。「ビートルズを発見したあの衛星か！」

「そのとおり。こんなご時世に天文学をつづけてこられたのも、このプロジェクトのおかげ」と彼女は答える。「もっとも、ここ数年は研究どころじゃなかったけどね」

\* \* \*

そうだった。そもそも〈コンソーシアム〉は、そのために設立されたんだっけ――ぼくは記憶をたぐり寄せる。

太陽系にもどってくるビートルズを確実に捕捉するため、かのエヴァ・ストラットをはじめとするペトロヴァ・タスクフォースがふたたび集結した。正式名称は忘れたけど、みんな〈コンソーシアム〉と呼んでいる。

国家さえ統廃合される混乱のなかで、かれらは人と技術の散逸を可能なきがり防いだ。壮絶ともいえる捨て身の努力により打ち上げられた三基のクールな衛星は、あえて財源確

保のために「ヘリー」ジエ、〈オリーシャ〉、〈ライランド〉と名づけられ、タウ・セチの方向を二四時間見張りつづけた。帰ってくるビートルズが逆噴射するペトロヴァ光をとらえてやろうって算段だ。地上の深宇宙ネットワークも、ビートルズからの電波に忍耐強く耳をすませた。

そうしてついに、二六年目がやってきたんだ。

そこから先は、報道されているとおりだ。

最初にとらえられたのは、光点のほうだった。分光データには、はっきりとペトロヴァ光の特異なスペクトルが写っていた。さらなる精密観測により、ひとかたまりに見えた光点は、三つの点の集まりだとわかった。

三機だ！ 三機のビートルズが、けなげにもどうにかこうにか太陽系にもどってきたんだ！ 四分の三。上出来だ。

速度プロファイルから推定された機体質量はなぜか、設計値よりわずかに大きかった。このときはまだ、謎の偏差だと誰もが思ってたんだよな。

十数日後、深宇宙ネットワークの老朽化した巨大パラボラアンテナが、ビートルズから



バースト的に送信されてくるストレージデータをとらえはじめた。

たちまち全人類が、上を下への大騒ぎとなった。混迷をきわめた世界情勢も完全に吹っ飛んでしまった。

人類には、隣人がいた。それも、たつたの十数年でいけるところに。

しかも、最初にかれらと友だちになったのは、われらがグレース先生なんだ。

そんなことって、ある？ 一三歳のぼくが知ったら、いったいどんな顔をするだろうか。

信じられない話だけど、グレース先生はタウ・セチで異星種属のエンジニアとぼったり出会ってすっかり意気投合して、ついに解決策を共同で見つけ出したらしい。

ビートルズからは、先生が保存したありとあらゆるデータが次々に送られてきた。ビデオ・レター形式の経緯説明にはじまり、日々の日誌、エリディアンという驚異の隣人の生態や文化、キセノナイトという驚異の物質の物性や加工方法、タウメーバという驚異の……オーケイ、キリがないな。ともかく、たつぷり五テラバイト分の“タウペディア”

がそこにあつたつてわけだ。

\* \* \*

「驚いたな……きみがあのビートルズの発見の現場に立ち会つてたなんて」当時の全世界のお祭り騒ぎを思い出しながら、ぼくはいう。

「そうね。毎日、新しい発見があつた」とレジーナがいう。「でも、あなただって、タウメーバ・ファイバーに突然放り込まれたんでしょ？」

「まあね。おかげでぼくもいまの会社と呼んでもらえたから、感謝しなきゃな」

前もってビートルズの全データを電波で受け取った人類は、とんでもないお土産の存在を知つてあわてた。タウメーバのミニ農場だ。ミニ農場は地球―月圏から充分離れたところで、そつと回収された。タウメーバが人類にとつて致死性ではなさそうだとはわかつてたし、もはや惑星<sup>プラネタリープロテクション</sup>検疫なんてあつてないようなものだけど、やっぱり地球にやつらを野放しにしたくはないからね。これは、科学というよりは、気持ちの問題だ。

そうやってはるばる旅をしてきたタウメーバたちの子孫を、毎日ぼくは牧羊犬よろしく追い回してすごしている。ぼくが働いているのは、タウメーバ農場の大規模化事業に飛び

ついたスタートアップ企業だ。流浪のはみ出し研究者だったぼくになぜ声がかかったのか、さっぱりわからない。グレース先生の昔の論文を、世界でいちばん読み込んでた自負だけはあるけど。

数カ月前からは金星へのタウメーバの制御播種も開始されていて、ぼくもやることにさらに増えた。

「グイエロー・サブマリナー」の調子はどう？」と彼女がたずねる。金星周回軌道に投入された、急ごしらえのタウメーバ播種船の愛称だ。金色のサーマルブラケットで覆われた巨大なタウメーバ・タンクは、たしかに潜水艦っぽく見える。

「いまのところ、効果は抜群だよ」とぼくは得意げに答える。「なにしろアストロファージの『巣』を根こそぎたたいてるからね！」

「まるで害虫の駆除剤ね。……こちらの観測でも、ペトロヴァ・ラインはすっかり暗くなってるわ。太陽の光度も九七パーセントまで回復してる」

「ワオ。最高のニュースだ」とぼくはいう。地球環境や世界情勢が落ち着くには、まだあと何十年もかかるだろう。でもぼくは、人類がなんとかここまで来たことを、素直に喜びたいと思った。

「ええ」と彼女もいう。

彼女のほうをちらりと横目で見る。星明かりのもとでは、彼女の表情も意図もよく読み取れない。ひとりで興奮していたばくとちがって、やけに淡々としている。うーん、ぼくは彼女のいいたいことに近づけているんだろうか？

ぼくらの共通体験はなんだ？——科学だ。グレース先生の科学の授業だ。

だからきつと科学が核心に導いてくれる——根拠のないそんな直感が、ふと浮かんできた。ひとまずはそれを信じてみるほかなさそうだ。

\* \* \*

「ドップラー効果って習ったじゃない？ 八年生のときだったかしら」珍しく、レジーナのほうから話題を振ってきた。

ぼくらはとりとめもない会話をつづけていた。夜の闇は深くなっている。潮の匂いも少し濃くなった気がする。いつのまにかアケルナルは地平線に隠れ、冬の大三角も西のほうに傾きつつあった。

「覚えてるさ。科学博物館エクスプローリアムの校外学習のとき、グレース先生が説明してくれたんだったな。ダウンタウンの緊急車両のサイレンを題材にして」

あの授業を受けてから、怖かった夜中の遠いサイレンがむしろ楽しくなったのを、ぼくは思い出した。

「ええ。サイレンが近づくときは音が高く聞こえ、遠ざかるときは低く聞こえる」

「そうだな。それが、どうしたんだ？」

「ヘリー・ジェ」のことなんだけど」彼女は唐突に、ペトロヴァ光観測衛星の話をはじめた。「ビートルズが帰ってきてからは、太陽系のペトロヴァ・ライン観測用に転用していたのよね。だけど、ちょうど去年のいまごろだったかしら、ふと思いついたの。久しぶりにタウ・セチの方向に向けてみようかなって」

「タウ・セチのペトロヴァ・ラインを見るために？」

「さすがにそれは無理」と彼女がいった。「星系全体が一ピクセルに収まってしまいうし、実際タウ・セチの観測結果は、なにも変わらなかった。……ところがタウ・セチから数十分角のところに、光点が写ったのよ。画像解析AIがようやく検出できるくらいなの、かすかな光点が」

ぼくは眉をひそめた。天文学の話がされたところで、ぼくは完全に専門外だ。「光点だって？ ビートルズを観測していた頃にはなかったのか？」

「ええ、過去のデータをぜんぶ探してみたけれど、そんな光点はなかった。わたしたちが

目を離していた数カ月のすきに生まれたことになる」

「遠くの銀河の超新星という可能性は？」誰でも思いつきそうな、まぬけな質問をしてみる。

「ありえない」思ったとおり、即座に彼女は否定した。「だって、ペトロヴァ・スコープよ。単色のペトロヴァ光だけを抽出するように設計されてるもの。超新星ならスペクトルは単色じゃないから、自動的に除外される」

ぼくは肩をすくめる。「なるほど」

でも、それならいったい、なんだっていうんだ？ ぼくに当てさせたいのか？ それとも——なにかをためらっている？

しばらく静寂がつづいた。

「オーケイ、降参だよ、レジーナ」ぼくは白旗を上げた。

彼女の溜息が聞こえた。「まだわからない？」

「そういわれても、ぼくは天文学は素人だよ」

「天文学の問題じゃないわ。工学よ」

「え？」

「あれほどのエネルギー量と単色の赤外スペクトルは、自然現象ではありえない」彼女は

つづける。「あきらかに、大量のアストロファージをエネルギーに転換したときにのみ出る人工的な光よ」

人工的——だって？

待ってくれ。

「まさか」ぼくは呻いた。

レジーナ、ひよつとして。きみがいいたいのは。

「もしかして……〈ヘイル・メアリー〉のエンジンの光が、太陽系から見えた……？」

「そういうこと」彼女の返事は素っ気なかった。

ワオ。なんてことだ！ 信じられない。〈ヘイル・メアリー〉が光学的に見えただっ

て?!

そんなニュース、聞いたことないぞ。

「うわあ」ぼくは頭を抱える。「だって、一二光年先だよ!」

「ここ一〇年のペトロヴァ分光学の発展をご存じない？」

オーケイ……そうだった。あの頃の人類は生き残るために必死で、ペトロヴァ光オタクみたいになっていったんだった。絶対にビートルズをとらえようと、なけなしのリソースを全部、ペトロヴァ光の検知技術につぎ込んだんだ。そして、そのクレイジーな技術の先鋒

にいたのが、まさに彼女なんだった。

「それに、フル・スラスト時のスピン・ドライヴから出る赤外放射のエネルギー量は、太陽表面を数桁は凌駕するわ」彼女はつづける。

「うへえ」とぼくはふたたび呻く。「うっかり当たったら、ナノ秒で宇宙の塵になるだろうな」

太陽より明るいなら、見えてもおかしくない気がしてきた。

レジーナは畳み掛けてくる。「ヘイル・メアリー」のスピン・ドライヴの幅はたかだか十数メートルしかない。だけど、ペトロヴァ光に特化した検出器と補償光学系を持つ「リー・ジェ」なら、原理的には検知可能なの。系外惑星の直接観測に比べたらずっと楽」  
ぼくの脳味噌はキャパオーバーで煙を噴きそうだ。どうどう、落ち着け脳味噌。まだそうと決まったわけじゃない。たとえば——ペトロヴァ光を出すのは「ヘイル・メアリー」だけとはかぎらないんじゃないか？

「ちょっと待った。エリディアン側の船の光っていう可能性は？」とぼくはたずねる。

「それは考えた。でもかすかな光度変化を見てみると、きっかり四秒ジャストのサイクルで出力が制御されているように見えたの。人類とは異なる時間単位を持ち、六進法を使う種属がつくったエンジンが、秒単位で動いているとは考えにくい。あれはやっぱり人類が



つくったものだ、とわたしは結論づけた」

「うーん……理屈は合うね」レジーナの優秀さに、ぼくは舌をまいた。

ふと、八年生の科学の授業を思い出した。実験中だけ盛り上がるほかの生徒たちとはちがって、レジーナは実験後の雑多なデータを粘り強く解析するのが得意だった。解析結果をことさら自己主張しないところも、いまと変わらなかった。

「驚くべき発見だな」とぼくはいう。だが同時に、ぼくの勘が告げている。

たぶん、彼女の話はまだ核心にたどりついていない。彼女がほんとうに伝えようとしているのは、きっとその先だ。

ドップラー効果の話は、まだ終わっていないかったんだ。

「だけど、その」ぼくは口ごもった。「ペトロヴァ・スコープで光が見えたっていうことは……」

ビートルズ帰還の全世界的な祝祭から約半年後、〈コンソーシアム〉から唐突に発表されたニュースを、ぼくは思い出していた。全人類に衝撃を与えたその緊急プレスリリースは、たしか今年の二月だった。

レジーナの観測は、それより数カ月も前ってことになる。

「もしかして、きみは……世界ではじめて気づいてしまったんじゃないのか。へーイル・

メアリー」のペトロヴァ光が」

恐る恐る、彼女にたずねる。ぼくは闇夜に感謝する。もし彼女の表情が見えていたら、ぼくはこの質問を彼女にできただろうか？

「——赤方偏移してること」

少し間を置いて、「……正解よ」と静かにいうレジーナの声がきこえた。

光ってやつはじつに雄弁なものだ。残酷なまでに。

波の発生源が遠ざかると波長が長くなるんだ、ほら、サイレンが低く聞こえただろうか？

——グレース先生の快活な説明を思い出す。

光も一種の波だ。光の波の場合、遠ざかると色が赤い側にずれる。これが、赤方偏移だ。レジーナによると、〈ヘイル・メアリー〉の噴射光に赤方偏移が見られたという。

これが意味するところはひとつしかない。

グレース先生を乗せた〈ヘイル・メアリー〉は——地球から遠ざかっている。

いまとなつては誰もが知る事実だけど、あの当時、それに気づいていた人間は皆無だった。

なにしろ、ビートルズに保存されていたグレース先生の日誌には、こう書かれてたんだ——燃料が手に入ったから、「地球に帰れる」って！

全人類が、この記述に色めき立った。

先生の日誌は、異星のエンジン“ロッキ”と別れたあとのビートルズ発進準備の記述で終わっていた。だからてっきり先生はビートルズを先に行かせて、あとからゆっくり帰ってくるんだろう、とぼくは思い込んでいた。ぼくだけじゃない。〈コンソーシアム〉でさえ、当時はそう推測していたのだ。なにしろ船は満身創痍だ。一刻も早くタウメーバをぼくらに手渡すためにビートルズを切り離して先に五〇〇Gで飛ばしてくれたのだろうというのが、かれらの解釈だった。

だからぼくらは、ビートルズだけが太陽系にもどってきたことに、なんの疑問も持たなかった。一・五Gで加減速すれば、〈ヘイル・メアリー〉は来年の春には帰ってくる。それが〈コンソーシアム〉の計算結果だった。

人類は完全に浮かれていた。

今年二月の〈コンソーシアム〉の緊急プレスリリースで公表されたひとつのテキストファイルが、グレース先生の計画変更をぼくらに突きつけるまでは。

でも、それより数カ月も前に、彼女は見てしまったんだ。

先生が遠ざかっていく決定的な証拠を。ぼくらの絶望を。おそらく人類ではじめて。直接、その目で。

いったいどれほどのショックを、彼女は受けたのだろうか。

\* \* \*

ぼくの心配をよそに、レジーナは淡々と話しつつづける。「もともと、遠ざかっているといても、太陽系から見ると〈ヘイル・メアリー〉の進行方向は約八二度傾いている。ほぼ真横に進んでることになるわ」

「真横？　じゃあ噴射光もほとんど見えないし、ドップラー効果も出ないんじゃないか？」

「ええ、ダウンタウンの緊急車両のような遅い物体ならね。でも真横に運動する物体が光速に近づくと、側面がこちらから見えるようになる。テレル回転って知ってるかしら？」

むしろ彼女は、さっきより饒舌なくらいだ。うーん、特にショックは受けなかったのかもしれないな。科学者らしいドライさだ。

「いや、聞いたこともないな」とぼくは正直に白状する。

「速度が○・九c付近になると、船尾を約六〇度こちらに向けたのとはぼおなじように見えるの。ペトロヴァ光の場合は相対論的ビーミングも加味されるわね。それに、横方向の相対論的ドップラー効果も無視できなくなってくる」

「そんなものがあるのか」相対論の話の聞くといつも、なにかだまされているような気分になる。「……あれ、待てよ。ペトロヴァ波長の光以外は写らないっていつてなかったっけ？ 赤方偏移した光でも検出できるのか？」

「それは織り込み済みよ。〈リー＝ジエ〉のペトロヴァ・スコープは、検出波長域を微調整できる」とレジーナが答える。「だって、ビートルズの噴射光もドップラー効果の影響を受けるわけだから」

「なるほど、そりゃそうか」

レジーナの論理には一分の隙もない。

「もともと、限界はあるわ。いまはもう船の加速が進んで、ペトロヴァ・スコープの観測可能波長域を超えてしまった。おそらく来年には、宇宙マイクロ波背景放射<sup>B</sup>に埋もれてしまうでしょうね」

「去年だったからぎりぎり気づけたってことか……。きみは強運の持ち主だな」ぼくは感

嘆した。「いったいどういう経緯で？」

「いちばん最初は、ペトロヴァ光よりも短い波長、近赤外光を検出しようとしてたの。でも何も写らなかった——だからトラブルシュートのために、いろんな波長で撮ってみた。そうしたら逆に長い波長、遠赤外で撮った画像に、たまたま光点が写ったってわけ」と彼女は自嘲気味にいった。「笑っちゃうわ。近赤外なんて、写らなくて当然よね」

笑っちゃうわって、どういうことだ？ ……いや、それよりも、なにか引つかかる。「短い波長……？」

近づいてくる物体が発する波の波長は、短くなるんだ——またしても、グレース先生の声が脳裏にこだまする。光なら、青い側にずれる。

「ああ……。青方偏移、ってことか……」思わずぼくは喘ぐ。「へへイル・メアリー」が、近づいてくることを想定してたんだな、きみは……」

「ええ。ほんと、ばかみたい」彼女はどこか悔しさをにじませた口調で、ぼくの推測をふたたび肯定した。

ぼくは言葉に詰まる。

レジーナは気まぐれに〈ヘリー＝ジエ〉をタウ・セチに向けたわけじゃない。完全に最初

からへイル・メアリー」の撮像を狙って、用意周到に準備していたんだ。

船がこちら側に向かっている——先生がもどってくる——と期待して、その速度まで考慮して。

「ばかなものか。あの頃は世界中のだれもが、船が帰ってくると思っていた。あの報道より前に、真相に気づいたただけでもすごいよ」こんなとき、ぼくは月並みな言葉しか思いつかない。

「ありがとう。そうね、運がよかったんだと思ってる」

ちがう。強運のおかげじゃない。彼女の慧眼以外のなにものでもない。

「ビートルズのあとを追いかけてきているなら、もうとつくに減速フェーズの光が見えていいはずなのよ」と彼女がいった。「仮にタウ・セチとたまたま重なっていたとしても、ペトロヴァ光観測衛星の年周視差があれば三基とも見えないわけではないはず。なのに、青方偏移した光は写らなかった。——周囲は、へイル・メアリー」に最悪の事態が起こったのだろうと解釈したわ。もともとそういうミッションだったのだから、気落ちするなつて」彼女の口調からは静かな怒りが伝わってきた。

「そんな」ひどいことをいうやつらがいるものだ。

「ありえないと思った」

「だよな」へイル・メアリー」の生存を微塵も疑わなかった彼女の信念に、ぼくは心のなかで喝采を送った。

「絶対に見つけてやると誓ったわ。退役したストラットに直接かけあって、こっそり観測機会を割り当ててもらった。ぜんぶの波長を試してみたら、遠赤外画像に、赤方偏移した光点が写った」彼女はだんだん早口になってきた。「まさかと思ったわ。設定を間違えたのだろうと思った。でも何回撮像しなおしても、結果は変わらなかった。だから、なにかほかに見落としがないか必死に探したの。タウペディアとビートルズを洗いざらいね——で、昨年末にようやく見つけたのが、例のあのメモ」

「あのメモって——まさか」

さらっととんでもないことをいわれた気がする。

「もしかして、グレース先生の——」ぼくは絶句する。

「そう。緊急プレスリリースで公表されたあれね」

今年の二月、全世界が騒然となった隠しファイル。通称、グレース・メモ。タウペディアの全データのなかで、タイムスタンプが最新のテキストファイルだ。ぼくらは真実をこ



のとき知った。

急いで書かれたらしいそのテキストファイルには、たったの数行、グレース先生が“友人”を助けるために急遽エリダニ40星系に向かうこと、地球にはもどらないことにしたが心配しないで欲しい、というようなことが、彼なりのいつものユーモアをもって簡潔に記されていた。ぼくもいまだに全文をそらでいえると思うし、〈コンソーシアム〉の緊急記者会見でそれを読み上げたストラットの思い詰めたような表情がいまでも忘れられない。

「あれを見つけたのも、きみなの?!」驚きすぎて、感覚が麻痺してきた気がする。

「ええ。光点や赤方偏移の件は結局公表していないから、あのメモだけが世間的には唯一の物証ということになるわ」

「ワオ……まさにワオだな」ぼくはうなった。

「これも運がよかっただけ」と彼女がいった。「赤方偏移のことがなかったら、いまでもメモに気づいていなかったかもしれない。なにしろファイル名が『新規テキストドキュメント・txt』だったし」

「うわあ。それはひどいな。ぼくなら確実に見落とすよ」

「しかもタウペディアが入ったRAIDアレイとはべつの、USBメモリの中にね。ビー

トルの内壁に緩衝材ごとダクトテープでぐるぐる巻きに固定されてて、『ここを見ろ！』  
ってペンで書いてあった」

「物理的に搭載されてたの?!

「ええ。電気的には切り離されてた。だからビートルズの送信データには含まれてなくて、  
ずっと見落とされていた」

「……うわあ」

なんてことだ。

彼女がそれを見つけてくれなかったら、ぼくらはいまでものんきに〈ヘイル・メアリー〉の帰還を待ちつづけていたかもしれないってことか。考えるだに恐ろしい。

全人類はいますぐ全力で、彼女の緻密さと執念深さに感謝しなくちゃならない。

でも、ぼくの知るかぎり、グレース・メモの報道発表にレジーナの名前は出てなかった  
と思う。あくまで〈コンソーシアム〉としてのプレスリリースだったはずだ。〈リー・ジェ  
エ〉のデータにいたっては赤方偏移どころか、ペトロヴァ光が見えたことすら公表されて  
いない。

「いやはや、すごいなんてもんじゃない。とんでもないよ。きみの成果は正当に評価され  
るべきだ。もっとアピールしたっていいんじゃないかな。ひどいことをいったやつらの鼻

もあかせるだろう?」

レジーナはしばらくだまっていた。

「ぼくからも〈コンソーシアム〉にひとこと——」

彼女の小さな溜息が聞こえた。「ありがとう——でも、いいの」

「……レジーナ?」

「あのメモを読んで、わたしがどんなに狼狽したか——あ、あなたならわかるでしょう? だって、ほかの動画や日誌では、これから帰るっていつてたのよ!」

彼女の口調がやや冷静さを失いつつあるのに、ぼくは気づいてしまった。

「先生はいつてたわ。ロッキーから燃料を分けてもらえることになったんだ、って。ほんとうにいいやつだって。これなら地球にもどれそうだから、どうかみんな、無事でいてくれって」

「ああ……」ぼくはぼかだ。無粋だった。

「サンフランシスコの海と空と坂道が恋しいって。いつかもう一度サリーズ・ダイナーのツエッグコンボをオーバーミディアムで、奮発してパンケーキもつけるんだって」

ぼくは拳を強く握りしめる。彼女の絞り出すような言葉を、だまって聞くことしかできない。

「授業、途中で抜けてきてしまったから、もう一度ちゃんとやらないとなつて。最後はとっておきのタウ・セチ早押しクイズをやるから、準備しておけよ……！」

\* \* \*

そうだ。ほんとうに、レジーナのいうとおりだ。

退屈な中学校生活のなかで、いちばん楽しかったのがグレース先生の科学の授業だった。一三歳という多感な時期に、先生の授業とその後の顛末を間近で見ていたぼくらの人生が、影響を受けないわけがない。

先生は知らないだろうけど、あのクラスから科学<sup>S</sup>技術<sup>T</sup>の分野に進んだやつは、ほんとうにたくさんいるんだ。レジーナとよく以外にも、アストロファージ<sup>E</sup>発電<sup>M</sup>のトラン、温室効果制御のテレサ、自然酪農を復活させたアビー、〈コンソーシアム〉を率いるハリソン……。残念ながらクラス全員がいまでも健在というわけじゃない。ぼくらはきびしい時代に生きている。それでもみんな、グレース先生の“遺志”を継いでなんとか人類を立て直そうという一心で、それぞれの分野で必死に頑張ってきたんだ。

だからグレース先生が地球に凱旋すると知って、ぼくらがどれほど驚き、喜びに沸き

立ったことか！　タウペディアに収録されていた先生の<sup>R T B</sup>帰投に関する一連のメッセージ、なかでも、かつての教え子に宛てたあの特別なビデオ・レターは、ぼくらにとって最高のサプライズだった。

レジーナもまた、グレース先生の影響を受けて人生を決めたひとりにちがいない。

彼女はもしかすると、ビートルズだけがもどってきたことをいち早く不審に思ったのかもしれない。〈コンソーシアム〉さえ浮かれているなかで、〈ヘイル・メアリー〉がほんとうに遅れてもどってくるのか、冷静に把握しようとしたのだろう。しかし、彼女の期待は完全に打ち砕かれた。光の波長は青い側じゃなくて、赤い側にずれていた。船は近づくどころか、遠ざかっていた。

彼女がこの大発見をなぜ自分の名前で大々的に公表しなかったのか、それはわからない。でも、きっと彼女は相当悩んだんだろう。自分の観測データの正当性は、彼女自身がきちんとよく知ってるはずだ。だからこそ、それが疑念を決定的なものにしてしまうのが——自分がその最大の貢献者となってしまうのが、耐えられなかったのかもしれない。

それでも結局、彼女は科学者として誠実に、傍証を探した。そして見つかったグレース・メモが、彼女の希望にとどめを刺した形になった。観念した彼女は歴史の表舞台に立

つことを選ばず、すべてを〈コンソーシアム〉に委ねたのだろう。

もしもグレース・メモの発見がなかったら——周囲の下馬評のとおり〈ヘイル・メアリー〉は消息不明扱いになっていたかもしれない。それに比べれば全然ましなのはたしかだ。少なくとも船は生きていて、四秒サイクルで出力を制御しながらエリダニ40に向かっている。グレース先生の望んだとおりに。だから客観的には決して悪いニュースではない。実際に世間の大多数は先生の決断を英雄的行動として受け止めている。

でも、彼女の落胆は痛いほどわかる。

だって、ぼくだってそうだったんだ。

先生が帰ってくるはずだった来年の春が、待ち遠しくてしかたがなかった。伝えたいことも聞きたいことも、山ほどあった。

だから、先生が帰ってこないと知ったとき、ぼくもほんとうにショックだった。ショックすぎて、滅菌したばかりのペットチップの箱をぜんぶひっくり返してラボでわんわん泣いた。

ファイル名に文句をいえる筋合いはない。だってタウペディアのほかのファイル群はきちんと整頓され、インデックスまでついていたからだ。よっぽどの状況だったってことは容易に推測できる。

先生はきっと、地球に向かうとする途中でエリディアンの友だちの危機を知ったのだろう。グレース・メモのタイムスタンプを見るかぎり、軌道力学的にいつて後もどりできるタイミングぎりぎりだったにちがいない。ビートルズはいつでも放出できるようにスタンバってて、RAIDアレイへのレイトアクセスは無理だったのかもしれない。急いでメッセージを書いてその辺のUSBメモリに保存し、ダクトテープでビートルズの中に貼り付けて、地球に向けて飛ばしてから、友だちを助けにもどったのだろう。

グレース先生のやったことは、正しい。圧倒的に正しい。

先生は、友だちと世界とを同時に救ってのけた。

ぼくだったら、とっさにそんな判断ができるだろうか？ うじうじと悩んでいるあいだに、友だちを助けるチャンスもビートルズを放出するチャンスも失ってしまうんじゃない

か？　そう、まるで、いまのぼくみたいに。

\* \* \*

「だからなのよ。……だからわたしは志願したの。ラテラルパス・ミッションに」  
レジーナの声ではつとわれに返る。なさけなく感傷にひたっていたぼくをよそに、彼女の声はもう、持ちまえの冷静さを取りもどしていた。

ラテラル  
横向きのパス。

劣勢のアメフトチームによる起死回生の大遠投パス、それがヘイル・メアリーだ。でもそんなプレーは文字通り、神頼みのやけくそパスだ。本来、クォーターバックは多彩なパスプレーを繰り出す。ラテラルパスなら、試合中に何回だって投げていい。

タウ・セチに挑む一か八かのヘイル・メアリーじゃなくて、横にいる“隣人”に向けたパス。エリダニ40に向けて何度でも投げて、ともにゲームをつづけていくためのパス。人々の新しい恒星間往還ミッション、ラテラルパスだ。ほんとうはもつと長くて堅苦しい名前なんだけど、〈ヘイル・メアリー〉のアメフト趣味にあやかっただけからは勝手にそう呼



んでいた。

彼女はひと息おいて、つづける。「太陽光度の情報がエリダニに届くのは、いまから一六年后。その頃にはたぶんグレース先生は、五〇代になっているはず」

「うん。エリドは高重力だし、さすがに身体にもガタが来ているだろうな」とぼくはいう。「そうね。だから、もうもどってくる気はないんだと思う」彼女の横顔が、シルエットだけ見える。「電波でもこちらの情報をエリダニに向けて送信しつづけているけど、やっぱり一六年かかるし、最大出力でもエリドの濃く濁った大気の底に届くかどうかはわからない」

「逆もおなじだな。仮に先生がエリダニからこちらに情報を送ってくるにしても、一六年だ」実際、地球から見えるエリダニ40の光度は、まだ回復していない。

「長すぎるのよ。わたしはいまから何十年なんて待てない」と彼女がいった。「だから、グレース先生に直接会いに行く。先生が元気でいるうちに」

レジーナの声には、たしかな熱量があった。

「わたしが見つけないとそいまいましい赤方偏移を、少しでも追いかけて打ち消してやるの。」

それがわたしのほんとうの志願理由」

\* \* \*

たぶん、近いことを考えたやつらが世界中にたくさんいたんだと思う。ただし、彼女よりはもうちょっと実務的な理由で。

ビートルズのデータから紐解くかぎり、人類とエリディアンは今後も宇宙の友人としてうまくやっていけそうな気がする。だが往復三五年という距離はあまりにじれったい。グレース先生に通訳をやってももらえるうちに人類が訪問しないと、いろいろとまずい。少なくともぼくは、先生なしにまったくうまくいく気がしない。

早く行動すればするほど、お手玉がもらえる——早押しクイズで学んだ、宇宙の普遍的真理だ。先生に残された時間はかぎられている。ぼくらはエリディアンより寿命が短くて、せっかちで、衝動的な種属だ。それにこの好機を逃したら、人類は外宇宙より内政を優先するようになるだろう。

だから、いまから使節団を複数回に分けてエリドに送る——ラテラルパス・ミッションだ。そのための船のパーツの一部が、二週間後、この浜辺からはじめて打ち上げられる。

八カ月かかる軌道上組立の最初の一步だ。

レジーナはみごと、第一便のメインクルーに選ばれた。ぼくはといえば、まあ、バックアップクルーだ。そして第一便が発射したら、すぐさま今度は第一便のバックアップクルーが第二便のメインクルーになって、出発準備にかかる。太陽系とエリダニ40との位置関係から、出発のチャンスは年に一回。つまり、ぼくもレジーナの一年後には、彼女たちを追いかけていくことになる。

いまのぼくはもう、グレース・メモを見て大人げなく泣いたりしない。むしろ、先生的確な判断と友情を誇りに思っている。エリドを訪れた最初の人類が先生でよかったと、心から感じている。

でもレジーナはきつと人一倍、この使節団にかける思いが強いんだ。

彼女は赤方偏移の第一発見者だ。だからこそ、その存在が許せないのだろう。自分の手で物理的にそれを打ち消したい気持ちはすごくわかるし、彼女にはその権利があつてしかるべきだ。

それに彼女がぼくにこの話を打ち明けてくれたことは、ちよつとうれしかったんだ。ともにグレース先生に学んだ同志として、だ。レジーナの成果はもっと広く知られるべきだ

けど、いまは彼女の気持ちを尊重して、ぼくらの秘密にしておこうと思う。

「ぼくもだいたいそんなところだ。先生に会いにいく最後のチャンスだと思ってね。――  
その、さっきはごめん。無神経なことをいった」

すでにぼくらは、人生の折り返し地点にいる。船内時間は片道四年半だけど、地球に残していく家族や友人たちには三五年間の留守番を頼むことになる。それも覚悟のうえだ。  
長期昏睡は使わない。あまりに危険な賭けだ、と〈ヘイル・メアリー〉のヤオ船長とイリュヒナが身をもって教えてくれた。それにこれはもう、特攻ミッションじゃない。投げたパスはもどってくる。

「おなじ教え子として、きみの落胆も覚悟も心から共感する。でも、その情熱には負けたよ。強いな、きみは」ぼくは素直に彼女のタフさを称賛する。持てる科学のすべてをつぎ込んで先生に追いつこうとしている彼女の意地を。「きみは選ばれるべくして選ばれたんだと思う。まぐれで採用されたぼくとは大ちがいだ」

彼女の視線がこっちを向いたように感じた。

「いまさら、なにを謙遜してるの。いまや、あなたは世界の比較宇宙生物学を牽引している。先生の研究を正しく継承した、タウメーバの第一人者でしょう。胸を張ってよ」

それは買いかぶりすぎだ。比較宇宙生物学は生まれたばかりの新しい分野だから、ぼくみたいな平凡な研究員でも世界の最先端で仕事ができるってだけだ。

「オーケイ。ありがとう、レジーナ」とぼくは肩をすくめる。「まあ、ぼくの数少ない武器だしね。これがなくなったら、あとはマッケンチーズづくりくらいしかやれることがなくなってしまう」マッケンチーズは、ぼくがしてくれる唯一の料理だ。マカロニもチーズも、いまはまだ代替品だけだ。

「あなた、なんだかグレース先生に似てきてるわよ」とレジーナが苦笑いする。

「ワオ。どのへんが?!」まんざらでもない。いや、正直にいう。めちゃくちゃうれしい。先生はぼくのヒーローであり、憧れだったんだ。にやつきがおさえられない。「顔? ……じゃないよね」

「しゃべり方とか、ものの考え方とかね。タウメーバと毎日じゃれ合っているとこういう感じになるのかしら?」

「培養のたびに、ぼくのかわいいタウメーバたちに声をかけているからね。オーケイ、みんな、きょうは分裂してみよう! いちばん早く増えたチームがお手玉獲得だ! ってね」グレース先生の口調をまねてみる。……おっと、スベったかな。レジーナの表情はまだよく見えない。でも、ちょっと笑ったような気がする。

それにぼくが日々こんな感じでタウメーバを扱っているのは、ほんとうのことなんだ。先生の科学の授業で感じたわくわくに突き動かされて、ぼくはいま、ここにいるのだから。レジーナもきつと、そうなんだと思う。

「――先生はずつと、ぼくの理想だった。かなり影響されてるのは否定できないね」ぼくは肩をすくめる。

「じゃあ、あなたもきつと、よい先生になれるわね」

「そうかな」

「わたしたちは、グレース先生のことを直接覚えていた最後の世代よ。それを次の世代に伝えていくのも、わたしたちの仕事。先生の、ものの考え方も含めて、ね」

レジーナはそういうと、天文薄明が終わろうとしている東の空をだまって見すえた。大西洋と空の境界がうすぼんやりと白みを帯び、季節外れの春の星座は輝きを失いはじめていた。

まもなく、地球にいちばん近い恒星が、今日も水平線の向こうから昇ってくるだろう。九七パーセントまで復活した白色光が、この小さなバイオスフィアを満たすだろう。

不意に頭の中で、穏やかなギターのイントロが流れだす。四機のビートルズのうち、

《ジョージ》の送信データのプリアンブルに仕込まれていた、百年近くも昔の曲だ。きっと設計者のいたずらだろうな。データ受信のたびに、人類が飽きるほど聴かされたフレーズ。かつて、宇宙のどこかの“隣人”に向けて、探査機ボイジャーのゴールデンレコードに収録されるはずだったナンバー。

「<sup>ヒア・カムズ・ザ・サン</sup>太陽が昇ってくる」口の中でそつとつぶやく。「<sup>イッツ・オールライト</sup>もう、大丈夫だ」

人類とぼくらの太陽はきつと、もう大丈夫です、ライランド・グレース先生。

もしかすると《ジョージ》からのブロードキャスト信号は、遠くエリドにも届いてるのかもしれない。それでも、ぼくらはその言葉を直接会って伝えたいんだ。先生とその友、ロッキーに。

風が風呂、気の早い海鳥の群れが、遠くでにぎやかに鳴きはじめる。長く暗い夜がようやく明けようとしているのを、全身で感じる。

いつか、和音と音符で話す<sup>ユエ</sup>ぼくらの<sup>リ</sup>最初の<sup>デ</sup>隣人<sup>イ</sup>たちにこの曲を聴かせたら、いまのこの感覚をわかってもらえるだろうか。

そんなことをぼくは徹夜明けの頭で、ぼんやりと考えた。

了